

トマトうどんこ病

1 病原菌の特徴

- (1) トマトうどんこ病は、糸状菌(かび)が原因で起こる病気で、病原菌の分生子が風などで飛散し植物体に付着して伝染します(写真3)。
- (2) 国内でトマトに発生するうどんこ病菌には *Oidium* 属菌 および *Oidiopsis* 属菌があります。
- (3) 発病適温が 20～25℃であることから春と秋に発生が多くなります。

2 被害の様子

- (1) 主に葉を侵しますが、多発時には葉柄、果柄、へたなどにも発生します。葉での発生は、菌によって病徴が異なります。
- (2) うどんこ病による被害は、葉の表面にうどん粉をふりかけたように白いかびを密生し、被害部の組織は黄化する病徴(写真1)のものと、葉の裏側にわずかに白いかびを生じ、葉の表面が黄化し褐変する病徴(写真2)があります。
- (4) 施設栽培では、発生が甚だしいと下葉から枯れ上がり、著しく減収します。
- (5) 露地栽培では、大きな被害にはなりません。
- (6) 品種により発生程度に差があります。

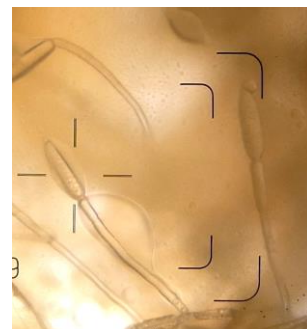


写真1 葉に白い粉状物を生じる病徴



写真2 葉が黄化・褐変を生じる病徴。

写真3 うどんこ病菌の分生子柄と分生子



3 発生について

(1)発生条件

ア 乾燥条件下でよく発生します。

イ 分生子の発芽適温は20～25℃であるため、露地栽培では6～7月及び9～10月に発生し、施設栽培では3～6月及び10～11月に多発生します。

ウ ほ場では、苗の定植直後に一時的に発生して、その後見られなくなり、茎葉が繁茂してくると再び発生するようになります。

(2)発生消長

促成栽培のトマトでは、定植直後から発生し、多発傾向となりますが、気温の低下とともに減少します。

翌春、気温の上昇とともに発生が再び多くなります(図1)。

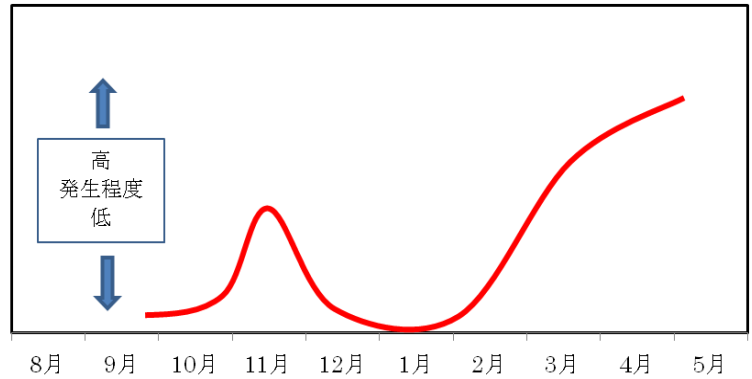


図1 促成栽培における発生消長

4 防除時期と防除方法

(1) 耕種的防除法

ア 換気は、過乾燥に注意します。

イ 伝染源となる病葉を早期に摘除します。

ウ 密植を避け、葉掻きや芽掻きをこまめに行い、陽当りと通風を良くします。

エハウスの被覆用ビニルの透明度を高めます。

(2) 薬剤防除

ア 発生初期に防除を行います。

イ うどんこ病菌は、薬剤によっては耐性菌が発現しています。このため、薬剤散布後、薬剤の効果を確認し、今後の薬剤選択に活かします。

ウ 耐性菌の発現を防ぐため、薬剤は同一系統の連用を避けます。

エ 施設栽培におけるダクト内投入散布法は、低温では効果が低いので10℃以上の温度を確保することが必要です。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会

■ 問合せ先(原稿執筆)

埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県